

2022年度（令和4年度）常磐大学高等学校 自己評価表

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
国語科	基礎学力の向上	・語彙や文法について、小テストや課題を実施して、基礎力の定着を図る。	A	A	・教育課程が変わり、多面的な評価を求められる中で、限られた授業時間をどれだけ充実させるかが課題である。大学入試が、資料の読み取りや複数テキストの読み比べなど、大量の情報を素早く的確に処理する能力を問う形式に変わった以上、少しでも多くの文章に触れさせ、語彙力や背景知識を増やし、思考するための土台を作ることが必要だ。生徒の対話的な活動の時間を確保し、生徒の主体性を客観的に評価しながら読解力の向上に努めていくことが重要である。
		・家庭学習においては、スタディサプリの授業動画などを積極的に活用し、授業の補強を行う。	B		
	読書への興味関心および表現力の向上	・教材に関連する本を紹介し、発展学習に繋がられるようにアドバイスをする。	B	B	
		・小論文などの指導において、読書を通して得た知識を基に自らの考えを確立し、相対する意見を踏まえながら論述する手法を習得させる。	A		
	自学自習力の養成	・授業内容の振り返りについて、iPadを活用し、自主的に学習する力を養う。	B	A	
		・定期考査の作問を工夫し、授業で得た知識を一般化して応用的に活用できる力を身に付けさせる。	A		
地歴 公民科	基礎学力の定着と理解の深化	・基本的な知識習得を徹底させるために、個々の学習状況に応じた支援を綿密に行う。	B	A	・ICT教材(ロイロノートなど)を用いた授業展開は、全学年にiPadが導入されたことにより、生徒が主体的に取り組む授業が一般化しつつある。今後は各科目担当者間の連携を深め、共通の課題・評価を設定し、生徒の思考力・表現力、主体的に取り組む態度をより丁寧に評価していく必要がある。
		・授業にリフレクション（振り返り）の時間を設け、生徒の学習状況を細かく把握して指導につなげる。	A		
	社会に対する興味関心の向上	・ICT教材（ロイロノートなど）を活用し、生徒が主体的な意欲を持って取り組むことのできる授業を展開する。	A	B	
		・生徒が共に学び合い、社会現象を多角的に捉える授業を展開する。	B		
	豊かな思考力・判断力・表現力の養成	・自ら課題を設定し、レポートを作成する経験を積ませる。	B	A	
		・定期考査の設問において、思考力・判断力・表現力を問うものを取り入れる。	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
数学科	教員の授業力の向上	・長期休業中等に、教科内で教科指導研究会を定期的に行い、教員同士の授業スキルの向上を目指す。	B	B	・長期休み（夏季・冬季・春季）を利用し、教科指導力の向上を目的とした研究会を数回実施した。内容は充実したものとなり、教科指導力の向上につながっているものの、全教員が集まることは難しく、今後の課題となっている。授業進度に余裕を持つことが難しく、模擬試験に取り組む姿勢は身につけてきたように感じるが、結果がまだまだであるため、模擬試験の結果も求めていくことが今後の課題となる。
	授業内容の工夫	・生徒にとって、よりわかりやすい授業を目指し、授業内での生徒間の話し合いや教え合いを積極的に行い、主体的に授業に参加するきっかけを設ける。	A	A	
	基礎・基本の充実	・授業内での演習や単元テスト、確認テストを計画的に行い、知識の定着を図る。	A	A	
	諦めない姿勢の育成	・日々の授業や課外を通して、模擬試験等の標準的なレベルの問題を行い、実践レベルでもしっかり取る組む姿勢を身に付ける。	B	B	
理科	生徒の実態・理解に応じた授業展開	・基本的な知識習得の徹底を図る。	A	A	・基本的知識の習得を図るための小テストは、コース共通で行うようにする。 ・興味関心を向上させるために、実験や視聴覚教材を利用しているが、科目・コースで共通に行えるように事前に計画を立てる。 ・考査の設問において、思考力・判断力・表現力を指定すること。
		・指導法の工夫や改善に努め、わかりやすい授業の展開を目指す。	A		
		・上級学校への進学後に必要な学力を身に付けさせる。	B		
	理科に関する興味関心の向上	・実験、実習を取り入れながら科学的に物事を見る力を養う。	A	A	
		・視聴覚教材等を活用し、生徒が主体的、意欲的に学びを深められるよう指導する。	A		
	豊かな思考力・判断力・表現力の養成	・グループワークや話し合いを通して、自分の考えをまとめ、深める訓練を行う。	A	A	
・考査の設問において、思考力・判断力・表現力を問うものを取り入れる。		B			
保健 体育科	生徒の実態に応じた柔軟な授業の展開	・生徒の実態の把握に努め、レベル別に授業を展開し、個々に応じた体育実技指導ができるようにする。	B	B	・授業となったが、少しずつ運動量を確保しながら授業展開ができた。生徒の実態に応じた授業としては使用する用具を工夫したり、ミニゲームを多く取り入れるなど生徒の実態に応じた授業を多く取り入れたが今後も改善を重ねていきたい。 ・今年度は新たに「生涯スポーツ」を取り入れ、その中でゴルフを選択できるようにした。今後も引き続き実施し、少しでも運動することの楽しさや喜びを感じてもらい、主体的に運動することができる生徒を育成していきたい。
	心身の健康への理解と生涯にわたって運動に親しむ態度の育成	・保健指導、体育実技指導の両面から、健康への理解を深めるとともに、卒業後も運動に親しむことができるよう、生涯スポーツにも着目しながら授業を展開していく。	A	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
芸術科	個性豊かな人間性と情操の育成	・鑑賞の質を向上させるため、近隣の美術館やホールを活用し、本物の芸術と触れ合う機会を作る。時代や社会に合った新しい教材の開発、自由課題の取り組み等によって総合的な能力の開発をする。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体的に取り組めるよう、新しい教材の開発と、新しい指導法を工夫・改善し、授業の活性化に努める。 ・生徒一人一人の進捗状況に応じた指導を行う。 ・ICTの効果的な利用方法を研究し、授業の改善を図る。 ・音・美・書の情報交換をさらに密にし、芸術科としての課題を見つけ、それが解決できるように努力する。
	基礎表現力の育成	・生徒の実態に即した年間学習計画を立て、計画に沿った学習指導に努める。	A	A	
	個人の能力・進路に応じた指導	・個別指導に努め、個人の能力、適性に応じた細やかな配慮をする。	A	A	
	教科内の協力推進	・音・美・書の情報交換を密にし、常に芸術科の目標、問題点を確認する。	B	B	
英語科	基礎学力の向上と定着	・Tokiva Can-doを通して、各学年のゴールを具体的に意識し、各技能向上を図る。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎力向上のための方策は実行しているものの、Tokiva Can-doが数年前に設定した内容でシラバス等へ反映させ運用してきたので、新教育課程と照らし合わせ、読解量の増強等見直すべきところを洗い出しながら、英語による自己発信力へつなげていく方策を検討する必要がある。また、向上しようとする意欲を育てるためにも、自分の実力を客観的に認識できる検定等の受検や、外部での発表の機会へのチャレンジをさらに奨励していく。
		・小テスト等を効果的に活用し、適切な語の調べ方、使い方をより具体的に指導し、自学方法の質向上を目指す。	A		
	自分の考え感想を英語で表現する活動の充実	・英語コミュニケーションの授業を中心に、音読活動を通して語彙力、読解速度を高める。	A	A	
		・ICT機器を効果的に使用しながら、英語読解で得た知識を活用し、自分自身の考えを述べる機会を設ける。	B		
	英語表現力の運用力向上	・英語表現の授業を中心に、典型的表現を用いて、英作文等を重ね、ペアワーク、プレゼンテーション活動等で実際に運用する。	A	A	
・ハリーエインリー高校とのオンライン英会話等を通して、実際に日本人以外の人とのコミュニケーションで英語を活用する機会を増やす。		A			
英語検定等、資格試験チャレンジの奨励	・授業を通して培った英語力がどのようなレベルに達しているか自己分析と他者へのアピールの材料の1つとして、検定のアナウンスと受検のための後押しを行う。	A	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
家庭科	生活に必要な基本的知識・技能の習得および生徒が主体的に取り組むことができる適切な教材の提供	・生徒が主体的に取り組めるよう適切な教材を提供する。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・課題への取り組み後のリフレクションを行うことにより、自らの生活課題の解決に向かう態度の成長がみられたので次年度も続けて行っていきたい。 ・ICTの利用方法について、さらに効果的な方法を研究し実践していきたい。 ・生徒の進捗状況に応じた指導を行っていきたい。
		・生徒一人ひとりの進捗状況に応じた指導を行う。	B		
生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実・向上を図る能力と実践的態度の育成	・ICTの効果的な利用方法を研究し、授業の改善を図る。	B	A		
	・学習したことを生かして、自らの生活課題の解決を図ることができるようにする。	A			
情報科	コンピュータや情報ネットワークを活用する知識や技能の習得	・Word・Excel・PowerPointのソフトを活用できるようにする。	A	B	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラミング教育をメインとした授業を展開していきたい。生徒の進み具合に注意しながら、論理的思考力の育成に尽力したい。また、PCスキルに大きな差があるため、苦手な生徒や欠席した生徒へのフォロー体制を充実させたい。
		・コンピュータやネットワークを活用して、情報を適切に収集・処理・発信する基礎的な技術と技能を習得させる。	B		
	情報を正しく扱うためのマナーやルール理解および主体的に活用する態度の育成	・研究レポートの作成を通して、情報を収集し、必要な情報を利用する力を育成する。また、画像の利用を通して、著作権やマナーを理解させる。	A	A	
		・発表体験を通して、自分の考えをまとめ、主体的に相手に伝える力を育成する。また、グループワークを通して他の意見との比較をさせる。	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
教務部	観点別評価の適正な運用	・各教科と共通理解を図りながら、観点別評価について適正に運用していく。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・観点別評価に関してより深く理解し、効果的な支援体制および学習方法について検討する。 ・学校の情報発信のあり方を見直し、本校の魅力を積極的に発信する。 ・校務システムの活用により、より効率的な校務のあり方を検討する。
	各分掌間の円滑な連携と教育活動の活性化	・教育活動が円滑に行われるよう、全職員の共通理解と協力態勢を構築する。	A	A	
	外部への情報提供を活性化	・HPを通して学校の情報を速やかに提供できるようにする。	B	B	
	新教務システムの導入と円滑な運用	・新しい教務システムを円滑に運用し、作業の効率化を目指す。	A	A	
	学校行事の円滑な運営	・各分掌との連携を密にして、学校行事が円滑に実施されるよう努める。実施後には検証し、次回へ向けて改善策を検討する。	A	A	
生徒部	水戸で一番制服をきちんと着る学校	・定期的な駅、学校周辺の巡回を実施する。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・集団行動ができるようになり、教員の指導力、統率力の向上が望まれる。また、SNSはカギと称されるブロック機能により他者から閲覧できない状況が増え、監視が困難な状況にある。注視したい。
		・全職員をあげての朝の服装指導、テスト期間の校外巡回を行う。	A		
	安心安全な校内環境の維持	・キャプテン、副キャプテンとの面談、生活アンケートを実施する。	B	B	
	生徒会との連携向上	・校則サミット、生徒会との意見交換会を実施する。	A	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
入試 広報部	広報誌・学校案内パンフレットを通じた学校理解の促進	・パンフレット、T-color、チラシ制作のタイミングと効果を検証し、年間を通して広報活動に効果的な制作予定を模索する。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・広報室の整理整頓を試みた。机の上に物を置かないようにし、先生や生徒が入りやすい環境になり、広報部の業務内容を校内にPRできたが、まだ改善の余地はある。部内の情報共有も円滑になった。SNSはインスタグラムの更新回数と内容を新しくした。年度初めと比べると、フォロワーは260%増えた。フェイスブックやLINEの活用も検討したい。秋のパンフレットを新たに作成し、細かな情報は自作の冊子を活用した。そこで扱う情報を充実させたい。
		・SNSに移行できる内容はSNSを利用し、パンフレットやリーフレットでこそ伝えることができる情報を精査する。	B		
	学校見学会の実施及び説明会参加	・オープンスクールと秋季学校説明会では在校生の活躍の場を増やし、生徒が生き生きと活動する高校をアピールする。	A	A	
		・施設や環境の良さだけでなく、教育方針や日々の活動の紹介に重きを置くことで、本校の魅力を伝える。	A		
部内の円滑な連携と効果的活動の模索	・ホームページ、Instagram、ラインを活用し、効果的な広報活動を展開する。	B	A		
	・入試広報部内の連携を密にし、業務の可視化に取り組み、ねらいや課題を共有する。	A			
保健部	生徒が心身ともに健康な状態で学校生活を送る支援の充実	・保健室経営計画に基づき、適切な保健室経営を行う。	A	B	<ul style="list-style-type: none"> ・安心・安全な学校生活を支援するため、引き続き、教員・保護者・SCとの連携を密にし、生徒の心身の健康についてチーム、組織で取り組む。また、今後も健診後の受診勧奨を速やかに行い、生徒の疾病異常の早期発見に努めるとともに、家庭との連携を密にする。同時に、生徒が主体的に健康管理をする力を醸成できる方策を探る。 ・教育相談については、対面・オンライン・電話等、生徒が安心してカウンセリングを受けられる方法も検討するとともに、次年度もグループエンカウンターやアサーショントレーニングを計画的に行えるように学年と協力して企画・実施する。 ・環境衛生検査の結果に基づき、生徒の適切な学習環境の整備に努める。
		・日頃から健康相談等がしやすい環境づくりに努め、担任や学年、教科担当者、管理職、保護者やスクールカウンセラーと連携を密に図る。	A		
		・各健康診断を学校医・学校歯科医と連携しながら適切に実施し、生徒の健康状態を速やかに把握する。結果に応じて、異常や疾病の疑いのある生徒には、できる限り速やかに受診勧奨を行うなど、生徒の健康の保持増進に寄与する。	B		
		・新型コロナウイルス感染症をはじめとする各種感染症の予防に努め、手洗いうがい・手指消毒の励行やマスクの適切な着用の呼びかけ、教室の環境整備（換気や消毒）や、正しい知識の定着を目指し、継続して啓発活動を実施する。	B		
		・保健だより・相談室だより、掲示物を作成し、生徒が主体的に心身の健康管理ができる力の醸成を図る。	B		
	教育相談活動の充足	・週2回のスクールカウンセラーのカウンセリングを適切に調整・実施し、切れ目のない支援に繋げる。	B		
・生徒のコミュニケーションスキルの一助となるよう、グループエンカウンターやアサーショントレーニング等を企画・実施する。		A			
適切な学習環境整備	・学校薬剤師による環境衛生検査を適切に実施し、不十分な点があれば全教職員で共通理解し、改善するよう努める。	A	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
進路部	生徒の主体的な進路選択	・面談（二者・三者）に応じた進路部からの情報発信をする。 （大学入試情報・傾向と対策・共通テスト分析等）	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・共通テストの分析については、手付かずで終了した。次年度は教科・授業担当教員にも「分析→生徒へのフィードバック」を行う手立てを設けたい。 ・模試分析は、各学年の進路部付教員が積極的に動いて行えた。今後も継続していきたいが、学校全体の取り組みとして確立する必要がある。 ・進路ロードマップは、学年における進路行事等では定期的に提示したが、年間を通しての共有が出来たかについては検証・改善を進めていきたい。
		・キャリアガイダンス・職業講話・学びの設計図を実施する。 （大学進学後の将来の姿も見据えた指導を行う）	A		
	進路実現に伴う学力の向上	・模試分析等を通じた学習方法・弱点補強のフィードバックを行う。 （具体的な勉強方法についての支援など）	A	B	
		・HR や進路行事における「学年団ー進路部」の協力体制を強化する。	B		
	教員間の進路情報の共有	・進路ロードマップに沿って学年団の教員との連携を図る。 （学年付の進路部スタッフ・学級担任との情報交換）	B	B	
		・生徒の実情や希望・適性を鑑みた情報を提供する。 （学級担任との打ち合わせを綿密に行う）	A		
特別活動部	生徒主体の学校行事	・新入生歓迎セレモニー、総体壮行会、部活動引き継ぎセレモニーにおいて、できる限り形式的にならないよう心がける。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ときわ祭に続きクラスマッチが生徒主体に移行しつつあり、よい傾向である。その他儀式的行事も生徒主体で企画運営できるとよい。生徒会活動はコロナ禍で、集会が制限されたこともあって活発な活動状況とは言えなかった。コロナ規制解除後に真価が問われる。部活動に関しては学業とのバランスという面で、課題が残されている。委員会再編は検討で終わってしまったので、実行に移せるよう協議を継続する。
		・未熟な分野に関しては教員から指導・助言をしながら、実行委員の生徒を中心に積極的にときわ祭の企画・運営に携わる。	A		
		・クラスマッチにおいて、今まで以上に企画や運営に自主的に関わる。	B		
	活発な生徒会活動	・意見箱の活用、活発な生徒評議会・生徒総会を通して、よりよい学校作りに貢献する。	B	B	
	部活動の活性化	・集団活動を通して、協調性・自主性・責任感・連帯感を育成し、豊かな人間性を育む。	B	B	
		・部活動を盛りあげるとともに、更なる学業との両立を図る。	B		
委員会の見直し	・新しい委員会の設置を検討するとともに、形骸化している委員会の見直しを図る。	B	B		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
研究 開発部	探究プログラムの進化と評価指標の検討、探究に向かう教員意識の醸成	・水戸市や笠間市など地方行政と連携した課題解決型学習に取り組み、社会に開かれた探究プログラムを開発し、生徒の資質・能力の向上につなげる。	A	B	<ul style="list-style-type: none"> ・第1・3土曜日の放課後を活用したゼミを開講して教科横断型の教育を展開し、思考力や探究心の育成を目指す。また既存の探究学習においても地域との連携を強化し、フィールドワークなどの充実を目指す。SNSを活用した学校内外への情報発信については次年度も積極的に行い、探究が本校の学校文化として根付くよう努力する。 ・ICT教育については、タブレット端末導入4年目をむかえる。教科を越えた情報交換の場を提供して、ICT教育に資する教職員スキルの育成を目指す。また、教職員・生徒ともに「慣れ」による情報モラルの低下が危惧される。情報リテラシー・モラルを育成する機会を継続して設ける。
		・学校全体で育成する資質・能力を意識した評価指標を作成するため、ときわ力を踏まえたシラバス・ルーブリックを準備し、課題を検証する。	B		
		・SNSを利用して学校内外への発信力を高め、本校教員の探究への理解度を向上させる。	B		
	ICTを用いた協働学習の推進と情報リテラシーの育成	・ICTを用いた生徒の協働学習を推進するため、教科を越えた情報交換の場を設けるなど環境整備に努める。	B	B	
		・教科教育や探究活動の中で情報リテラシーを高めるプログラムを展開する。また、教職員に対しても情報モラル・スキルを高める機会を設定する。	B		
	社会に開かれた教育活動の展開	・大学特講を通して、学問分野に対する興味・関心を高め、社会で必要とされる資質・能力の育成に努める。	A	B	
・外部団体と連携した事業を開発し、生徒が地域社会の中で成長する場を設ける。		B			

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
国際教育	国際文化を体験することによる、外国人と日本の文化を共有する機会提供	<ul style="list-style-type: none"> オンラインディスカッション、バーチャルミーティング、留学の機会、文化交流の機会を通じて、外国人や外国の文化と交流する本格的な機会を提供する。文化の違いを体験して理解し、自分たちの未来を切り開く手段を見つける。 	A	A	<ul style="list-style-type: none"> 国際プロジェクトの2022年度は刷新であった。3年越しに、Harry Ainlay Programが再開され、生徒たちは期待を上回り、成長することができた。しかし、生徒たちの成功には、困難がなかったわけではない。たとえば、ホストファミリーとの生活に順応し、ホームシックを克服することは、彼らが直面した困難であった。しかし、生徒たちは、それぞれの留学プログラムを通じて外国人と直接交流することで、自分たちの生活を豊かにすることができた。 2023年度は大きな盛り上がりを見せている。久しぶりに交換留学生を迎え、10日間語学研修の文化体験を再開する。2022年度の経験を評価した後、国際プロジェクトに取り組み、困難を克服し、生徒の全体的な経験を向上させる方法についての理解を深めていく。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
1 学年	学びのスタイルの 土台形成	・Classi の学習時間記録や、iPad 及び手帳等を用いて主体的なスケジュールマネジメントができるようにする。	B	A	・主体的なスケジュール管理については課題が残る結果となった。本校では統一したプラットフォームによるスケジュール管理を推奨できる環境が整ってはいるものの、各自にその運用については委ねざるを得ない。そういった意味では効果的な声かけや、利用方法のレクチャーにもっと時間を割くことができれば良かったと考えている。
		・スタディサプリの連動課題配信を軸とした面談を通して、効率的な苦手意識の解消ができるようにする。	A		
	協働することの強さ の認識	・探究学習や普通の授業を通して、他者と協働することの良さを知ることができるようにする。	A	A	
		・校外での活動を積極的に紹介することで、社会の中で生きる協働性に触れる機会を広く知ることができるようにする。	A		
	自己にとって最適な 文理選択へのサポ ート	・担任面談やコース面談等を通じて、生徒のキャリア意識の変化をリアルタイムでフォローできるようにする。	A	A	
		・1、2学期に段階を踏んだ文理選択を題材にしたLHRを企画することで、最適な文理選択をサポートできるようにする。	A		
2 学年	学力の向上	・学習時間の記録と考査結果を自己分析させ、タイムマネジメント意識の向上と計画的に目標を達成する学習習慣の養成を図る。	B	B	・学習に対して、時間対成果の分析を生徒自らが主体性をもって行い、課題を設定し方法を模索し続ける姿勢を育む。 ・2年間で培ってきたグローバルな視点を卒業後社会においてどのように活用するか、生徒自らが考え、進路開拓に挑めるよう支援する。
		・模試の分析を充実させ、教科面談やコース面談を通し、生徒と課題や目標を共有することで支援の充実を図る。	A		
	キャリア教育の充実	・校外学習(地域おこし協力隊との活動)やキャリアガイダンスを通し、グローバルな視野に立った職業観の拡大を図る。	A	A	
		・新書を読むことを奨励し、一人ひとりが世の中の課題を捉え、自分に必要となる資質・能力は何かを考え、表明する。	A		
	修学旅行の充実	・探究マインド・スキルを活用し、現地大学生とのフィールドワークやディスカッションなどを取り入れた平和学習に臨む。	A	A	
		・企画準備の段階から主体的に行動することやルール・マナーを守ることの意義を理解させるとともに他者を思いやる心を育む。	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
3 学年	基本的な生活習慣及び最高学年としての自覚と品位の確立	・清掃の徹底、教室整備など学習環境を充実させたり、挨拶の励行、制服の正しい着用など規則正しい生活を習慣化させることで学習に集中できる環境を保つ。	A	A	
		・遅刻や欠席などの防止について、家庭との連絡を密にする。	A		
	進路目標の具体化及び実現のための様々な力の養成	・日々の授業の大切さを認識させ、かつ、予習や復習など家庭学習の確保と定着化を図り学力向上に繋げる。	A	A	
		・受験に関する最新情報を生徒、保護者に提供する。	A		
		・面談を適宜行い、自己理解を深めさせて生徒一人一人に対応した進路指導を実施する。	A		
		・探究やHRの授業を利用して小論文や面談について学ぶ時間を設け、受験期には複数の教員で個別に指導する。	A		
		・習熟度や進路希望に応じて、0限ゼミや長期休業中のゼミを充実させる。	A		
社会規範の遵守など、進学や就職に必要な社会性の確立	・HRの授業などで、社会生活におけるマナーの大切さや時事問題などに触れる機会をもつ。	A	A		

判定規準 A:大変よくできた B:よくできた C:ふつう D:やや不十分 E:不十分